

### Ⅲ 事業で用いた手法の評価及び成果

#### 1 学校巡回講演会

##### (1) 江田島市立能美中学校

###### <手法の評価>

- ・外部講師によるテーマを設けた本の紹介は、生徒にとって目新しく読書への関心を高めるのに有効であった。
- ・身近な公共図書館の職員からの案内は、親しみやすく利用意欲を高めるものであった。
- ・ブックトーク後、一括貸出の本が身近にあることで、生徒の関心をひくことができた。

###### <事業の成果>

- ・生徒への当日アンケートで「読んでみたい本があった」が64%、「本を読みたくなかった」「本のおもしろさを知った」が50%だった。また「これからも本についての話を聞いてみたい」は72%だった。ブックトークや公共図書館からの紹介により読書意欲が高まった。
- ・「地域の図書館の利用回数（一ヶ月）」は男子平均が約0.3回から0.8回に増え、利用が0回の生徒が5人減っている。当日アンケートでも図書館職員の案内への感想を記入している生徒が15%おり、公共図書館への具体的なイメージをもつことができた。
- ・教職員への当日アンケートからはブックトークの手法と、公共図書館で色々な取組をしていることへの評価が高く、読書・図書館利用についての教職員の理解を深めることができた。
- ・教職員への事業終了後アンケートからは、事前・事後指導や年間を通じた取組等の重要性を指摘する意見が多く、継続した実践の必要性が認識された。
- ・学校の図書室が普通教室から遠い所にあるため、広島県立図書館から貸出の本を廊下に並べて展示した。生徒の身近に本を置くことは、生徒にとって親しみやすく利用しやすいことが明らかになった。
- ・事業終了後、生徒会文化委員が本を選んで展示をしたり、ブックトークを実践したりと、生徒から生徒へ本を薦める取組が行われるようになった。また、「図書室に読みたいと思う本がない」という調査結果を受け、生徒に図書室に置いてほしい本のアンケートを実施し、新刊購入に役立てられた。
- ・ブックトークの実施について、広島県立図書館「ヤングアダルトつうしんNo. 7」を県内中高等学校に配布し、広島県教育委員会「わたしの・我が家の愛読書！」キャンペーン」HPに掲載する等、県内に取組の成果を情報提供した。

###### <課題>

- ・ブックトーク直後は読書意欲の高まりが見られたが、時間がたつと利用が減ってきたとの指摘があった。事前事後指導や、年間を通じた読書指導が必要である。
- ・事後アンケートで「本を読むのが好き」が女子で10%増加しているが、学校図書室の利用はそれに比例していない。生徒の利用しやすい図書室の整備や、年間を通じた読書指導等継続した取組が必要である。そのためには、教職員が図書館や読書について研修する機会の提供が重要である。
- ・生徒への事前アンケートから「読書・図書館利用について困っていること」として、「図書館・図書室に読みたい本が無い」が50%「何を読んでよいかわからない」が30%であった。また教職員のアンケートでは、ブックトークや本の紹介についての意義は認めているが、紹介する本や新しい本の情報を知りたいという意見が多かった。YA向けの本についての情報を公共図書館が提供する等、学校と図書館が連携していく必要がある。
- ・中学生向けのブックトークができる人材は、まだ充分とはいえない。今後学校・図書館・読書ボランティア関係者対象に養成をしていく必要がある。また、本を直接手渡していく人の存在も必要である。

##### (2) 広島県立大門高等学校

###### <手法の評価>

- ・絵本を中心とした命の大切さに関する講演は、生徒の感性に訴える内容であり、読書への導入となる内容

であった。

- ・主幹図書教諭が図書新聞を発行し広島県立図書館から貸出の図書を、効果的にディスプレイする等、生徒と本をつなぐ細かい取組が行われた。

#### <事業の成果>

- ・生徒への当日アンケートでは、話の内容について興味を持った生徒は41%、読んでみたい本があった生徒は29%、これからも本についての話を聞いてみたい生徒は54%だった。本に関する講演で読書への意欲が高まった。興味を持ったこととしては、「絵本のよさ／奥が深いこと」、「命の大切さ」を挙げた生徒が多く、「読書の大切さ」を感じ「井野口さんの詩」を読んでみたい等の感想を書いている生徒もあった。
- ・講演を受けて、主幹図書教諭が図書室で一括貸出の本を効果的に展示し、「ライブラリーNEWS」で生徒に紹介する等の取り組みを行い、図書室の利用促進につながった。また学校のHPでも講演会の様子を紹介した。
- ・一括貸出の本のうち、生徒に人気のあった本を学校でも購入する等選書の参考にされた。また元々図書室にあった本でも、一括貸出をきっかけに貸し出されたことから、ディスプレイ等本の紹介方法の重要性を再確認された。
- ・主幹図書教諭が事業の成果について、広島県高等学校教育研究会図書館部会研究会で発表し、各学校での活動の参考にされた。

#### <課題>

- ・教職員の生徒への本の紹介に対する関心は高かったが、「紹介する時間がない」「本の情報を知りたい」等の意見が多かった。教職員向けの本の情報を効果的に提供していく必要がある。
- ・以前より本を読むようになった理由として、「おもしろい本・読みたい本があったから」「友だちに薦められたから」を挙げる生徒が多かった。読みたくなるような本を、友だちから薦めるという手法を活用した取組を実践すれば有効ではないかと考えられる。学校・公共図書館等へ、読書推進の事例として提案する機会が要る。

### 2 YA向け推薦図書リーフレットの作成

#### <手法の評価>

- ・十代による本の紹介文は、会話口調のものもありYA世代には読みやすいものとなった。また表紙等のイラストを「来いぶらり・フレンズ」が担当し折りたたみ形式でカラー印刷することにより若い人の関心をひく体裁になった。

#### <事業の成果>

- ・YAサービスの参考のため公共図書館と関係機関に配布し、県立図書館HPで公開した。
- ・「YA FAIR」参加者に配布し、当日アンケートによると「参考になった」が83%で、手に取りやすい形や親しみやすいイラスト等好評であった。

#### <課題>

- ・十代の薦める本の紹介という手法とその成果を、今後学校や関係機関へ紹介を行う必要がある。
- ・YA向けの新しい本の情報を、コンパクトな形で定期的に紹介していくと更に効果がある。

### 3 図書館へ行く月間

#### <手法の評価>

- ・県内で複数館がYA向けの事業を行うことで図書館が互いの行事を参考にすることができ、広報でとり上げられたことで県民にも関心を持ってもらうことができた。

#### <事業の成果>

- ・県内87館のうち、18館で20件の催しが行われた。平成18年度調査によると、YAサービスを実施している図書館は、34.7%であった。今回その約6割に当たる館で期間中取組が行われた。

- ・ YAコーナーを設置していない図書館でも期間中資料展示を行う等、この機会にYAサービスに取り組みきっかけとなった。
- ・ 広島県立図書館HPで行事一覧を掲載することで、他館の取組を参考にすることができた。

#### <課題>

- ・ 県内で統一した期間に実施するためには、公共図書館協会等で事前に協議する等早めに取り組む必要がある。
- ・ 公共図書館職員向けのYAサービス研修を実施し、職員の理解を深めるとともにYAサービスの実施率を高めていく。

### 4 「YA FAIR」

#### <手法の評価>

- ・ 作家一人による講演ではなく、色々な立場の県内有名人によるトークショーの形式にしたことで、気軽に参加して読書の楽しさを実感できる内容になった。
- ・ 展示・ブックカバー等の制作は、自身が楽しんだり学校・公民館等での参考にす等YA自身とYAに本を手渡す人に参考となる内容だった。
- ・ YA向けの本や、図書館で活動するボランティアの紹介は、YA読書推進の方法として参考にさせていただいた。
- ・ 「来いぶらり・フレンズ」がポスターのキャッチフレーズ・イラストの作成に携わることで、10代の感覚を活かすことができた。

#### <事業の成果>

- ・ 当日アンケートでは、「おもしろかった」「楽しかった」等が27%、「本を読みたいと思った」が90%だった。
- ・ 行事の中で評価が高かったのはパネルディスカッション84%、オリジナルブックカバー&しおり制作32%、推薦図書リーフレット30%、図書の展示17%、オススメ本のPOP17%だった。
- ・ 読書の楽しさを提案する方法として、対象の世代に人気のある人のパネルディスカッションは気軽に参加でき、読書意欲を喚起するのに有効であった。またパネリストは、作家に限らず様々な立場の人で構成することで、それぞれの分野に関心のある人を集めることができた。

#### <課題>

- ・ 読書推進の催しの形態として、十代や十代に理解のある色々な分野の方によるパネルディスカッションや、参加型のコーナーの実施等についての成果を、学校・公共図書館等関係者に情報提供していく必要がある。



### 5 YA体験活動

#### (1) (中・高校生ボランティア養成講座)

#### <手法の評価>

- ・ 実際に読み聞かせを実践している方による講座で、具体的なお話やアドバイスを聞くことができた。
- ・ 読み聞かせのグループ練習や、ミニおはなし会にインターンシップの学生や、先輩の「来いぶらり・フレンズ」も加わることで、和やかな雰囲気でも実習し、お互いの意欲を高めることができた。

#### <事業の成果>

- ・ 新規12名、「来いぶらり・フレンズ」4名の参加があった。
- ・ 参加者アンケートでは「講座が大変参考になった」が75%、「参考になった」が25%だった。また「良い

体験ができた」が76%だった。13名の新規参加者のうち、8名が「来いぶらり・フレンズ」として登録した。  
・養成講座に先輩が参加し、さらに活動をレベルアップする意欲が高まった。

#### <課題>

・中・高校生にとっては、夏休み中の参加が容易であるが、図書館行事の重なる時期でもあり、調整が必要である。

#### (2) (中・高校生ボランティア活動)

##### <手法の評価>

- ・おはなし会・小学生対象の講座案内・ポスター等の作成・本の紹介POP作成・「ヤングアダルトつうしん」の編集等、自分の得意を生かして参加できる時に参加するやり方で、無理なく活動を続けることができた。
- ・おはなし会や講座案内等は行事の事前に練習して参加するように努めた結果、一定のレベルを保つことができた。
- ・「来いぶらり・フレンズ」の活動にインターンシップの学生や職場体験学習の生徒も誘うことで、お互いに刺激を受け、新たなメンバーの確保にもつながった。
- ・青年地域貢献活動「やる気じゃネット！青春じゃけん」実践交流会で活動内容を紹介することで、県内青年ボランティアと交流することができた。
- ・「YA FAIR」では、キャッチコピーの検討・ポスター作成・行事の考案等企画段階から携わり、自分達の催しという雰囲気でも盛り上がった。
- ・高校を卒業して大学生になっても活動に参加する人が多く、中・高校生をリードして活動したり、文章・イラスト等レベルの高いものを作成したりできた。
- ・活動を重ねる毎に職員との人間関係もできて、率直にアドバイス等ができるようになった。またフレンズ同士も話はずんで、交流を深めている。
- ・県立図書館HPで随時取組を公開することができた。HPの1月当たりのアクセス数は、約100件である。
- ・「来いぶらり・フレンズ」の活動に関心が高まり、広報等でも取り上げられる機会が増えた。

##### <事業の成果>

- ・読み聞かせ等回を重ねて実践しており、お互いの読み方を学んで活かそうと心がける等、レベルアップしようとする意欲がでてきた。
- ・「小学生のための図書館活用講座」等は、説明・案内等内容を覚えて演じるという「来いぶらり・フレンズ」が主役を務める企画が定着した。
- ・「来いぶらり・フレンズ」の編集による「ヤングアダルトつうしん」号外を発行することができた。
- ・中・高校生の意見を、図書館の活動に反映できた。

##### <課題>

・中・高校生は活動できる日が限られており、毎年新たなメンバーの養成と確保が必要である。



## IV 事業の成果の普及方法

### 1 学校巡回講演会

事業実施校のHP等で公開し、読書や図書館の利用・生徒への本の紹介等に関する生徒や教職員対象の調査結果を報告書にまとめ、関係機関・県内公共図書館等に紹介する。また、広島県高等学校教育研究会図書館部会研究会で紹介する。広島県立図書館及び広島県教育委員会のHPで公開する。

### 2 YA向け推薦図書リーフレットの作成

広島県立図書館及び広島県教育委員会のHPで公開し、広島県公共図書館協会職員研修会で紹介する。また各報道機関に紹介する。

### 3 図書館へ行こう月間

広島県立図書館のHPで行事一覧を公開し、広島県公共図書館協会職員研修会で紹介する。

### 4 YA FAIR

広島県立図書館「ヤングアダルトつうしん」で紹介し、広島県立図書館のHPで公開する。

### 5 YA体験活動

広島県立図書館のHP及び(財)ひろしま文化振興財団HP「ブンカッキーネットひろしま」で公開する。また広島県公共図書館協会職員研修会、青年地域貢献活動「やる気じゃネット!青春じゃけん」実践交流会で紹介する。

### 6 その他

広島県立図書館のHPの「子ども読書応援プロジェクト」のページで事業内容を公開する。(平成19年8月2日開始 平成20年2月17日現在のアクセス数 1,220件) また、広島県立図書館HP「ヤングアダルトのページ」でも公開する。(1月平均のアクセス数は、約600件)

## V YA世代読書活動推進実行委員からの提言

YA世代読書活動推進実行委員会委員長

中島 正明

YA世代読書活動推進実行委員会報告について、次の点が指摘できます。

### 成果

- 1 YA世代への読書推進の働きかけは、確実に効果が期待できるものであることが確認できた。
- 2 本の紹介や特別貸出によって、生徒の読書関心の啓発や本への興味を高めることに有効であった。
- 3 学校巡回講座の実施は、生徒だけでなく教職員の意識改善に効果があった。
- 4 「YA FAIR」は、生徒たちの感性に応える企画が功を奏して、気楽な雰囲気の中で図書館や読書への親しみやすさ、楽しさが増した。
- 5 企画から実施まで生徒たちの参加体験が重要なことが確認できた。

### 課題

- 1 働きかけは有効であっても、その効果や意識を持続させることが困難であること。活動の日常化、継続化が必要である。
- 2 子どもの読書環境にとって一番身近な学校図書館の充実が不可欠であること。さもないと、公共図書館と学校（図書館）とが連携して子ども読書を推進することが困難である。
- 3 とくに、双方に担当する人が存在して、日常的にコミュニケーションをとっていることが重要なポイントであろう。少なくとも子どもの読書習慣の形成という観点からすれば、キーパーソンの存在は今後の読書活動推進の最重要課題と考えられる。

## 「今回の事業について思うこと」

YA世代読書活動推進実行委員会副委員長

小林 いづみ

学校巡回講演会では、能美中学でブックトークをする機会を与えていただきました。紹介する本は、絵本、ノンフィクション、小説、写真集と、できるだけ幅広く選ぶようにしましたが、ひとりひとりの興味の幅も広がり、男女の差も大きくなる時期であることを考えると、ブックトークで紹介した本の中に、興味をひく本がなかったという子もいたでしょう。ただ、おもしろそうに思える本がなくても、いろいろな本があることを知ってもらいたい、本を手にするのもたまにはいいな、何かの時には本も役に立つかもしれない・・・と思ってもらえたら、というのが私の願いでした。思春期のむずかしい時期を生きている彼らに、本が支えになることもある、ということを知ってほしかったのです。感想の中に、「本を読むのもいいなと思った」「本の大切さ（おもしろさ）を知った」といったような、その思いを汲み取ってくれたものがあつたことが特にうれしく思われました。地元の公共図書館の館長さんのお話が、私の思いをおぎなう内容だったことも大きいと思いました。

今回のブックトークもそうですし、近くの中学校で、昨年からはじめた各学年毎月1回の読み聞かせでも、確かな手ごたえが感じられ、YA世代もきっかけさえあれば、本に興味を持つのだと実感しています。ただ、それを習慣的な読書に結び付けていくには、今回の事業で、能美中学の先生方も指摘されていたように、継続的な取り組みが必要になります。ただでさえ忙しい中高生、本を読む自由な時間は限られている上、テレビ、ゲーム、インターネット、ケイタイと、本以外の娯楽がたくさんある時代です。読みたいと思った本が身近にあることが、彼らと本を結びつける最低限の条件だとすると、そのためには、一番身近にあり、一番たやすくアクセスできる学校図書館の整備・充実、専任職員の配置がどうしても必要になってきます。

ただ、すぐにそれを望むのもむずかしい現状では、学校現場、公共図書館、ボランティアそれぞれが力を尽くしてできることをしていくしかありません。公共図書館でいうと、今回、中学校、高校双方の先生ともあげられていた、「YA向きの本の情報」を始めとしたさまざまな情報の発信、団体貸出など直接的なバックアップのほか、今回の事業でも行ったリーフレットの作成、フェアの開催、中高生ボランティアの養成や活動など、さまざまな方法で、YA世代にアピールしていくことは、非常に大切だと思われます。出版・流通も市場原理に支配されている現代、テレビ・映画化された本、ベストセラー、タレント本などは、書店で平積みになされ、どこでも簡単に手にはいりますが、そういう本ばかりでなく、読みつかれてきた本、そして、次代にも残していきたい本を、多感な若い時期にぜひ知ってもらいたいと思うとき、そのような情報を提供していける公共図書館の役割は決して小さくはありません。中高生の読みたい本と、おとなの読んでもらいたい本とのギャップは大きいかもしれませんが、あきらめずに読んでもらいたい本の情報を伝え続けていくことは必要だと思います。伝えなければ、知らずに終わってしまうし、何がきっかけになるかはわからないのですから。

そう思うと、一番中高生の身近にあり、普段の様子もよくわかっている先生方が本をすすめてくださる意味合いも大きいと思います。今回の中学校でのブックトークでは、外部の講師ということで、目新しく、印象に残つただろうという意見が先生方からみられましたが、継続的になされていくのであれば身近な人からのブックトークが、かえって有効なのではないかとも思われ、先生方にもブックトークにぜひ挑戦していただきたいと思いました。